



W.A. Mozart Hiroba

「モーツァルト広場」 SINCE 1995

第35号



夕暮れの雑感二題

モーツァルトへの手紙 (その11)

会員番号 K.618 加藤 明

モーツァルトよ、あなたへのオマージュを書き連ねて、すでに本稿で35篇もの拙い文を重ねてきました。書くことで少しでも貴兄に接近できればと思っておりましたが、あなたはますます遠ざかるばかりで、正直参ってしまいます。

でも、どこで何があっても貴兄の音楽が鏡となっては、小生を「らしく」させてくれているように思います。そのことを伝え続けたいと念じつつ、また一篇。

手形山に住む義兄が病んで、見舞うことが多くなった9月でした。

A高校の野球場の脇を車で走らせていたら、ホームベース側のフェンスに【鎧袖一触】と書かれた横断幕が眼に入りました。

一瞬考え込んだがその四文字の意味が解らず、家に帰って早速調べました。

鎧袖一触 (がいしゅういつしょく) とは「相手を容易に打ち負かすたとえ」で、鎧の袖にわずかに触れただけで簡単に敵を打ち破る、ということかにも勇ましい四文字熟語でした。

何やら、戦前の軍国主義の臭いすら感じてしまいました (最近この国で「一億総活躍」云々とか言い出したせいかもしれませんが)。

A高校の野球部の理想としている戦い方なのか否かは兎も角、今日そんな容易に敵を倒せると思いがった野球チームがあるのかしら?と、いささか怪訝な思いに耽ってしまったものです。

大きなお世話だが、己の違和感を払拭するため、まだ【一球入魂】とか【切磋琢磨】のほうが高校生には相応しいのではないか、と思ったものです。

10月の末、母校のラグビー部が花園を賭けた決勝戦を目の前で演じようとしていました。

今度はスタンドから何気なく対面する母校の応援団席を眺めていたら、【乾坤一擲】と書かれた大きな横断幕が眼に飛び込んできました。

一瞬、「あれっ何だっけ」と己の記憶装置をいじくりまわしてみた。

しかし、一向に納得できる読みが浮かんでこないのです。

そればかりか、その四文字の意味するものすらチンプンカンプンなので、内心面白くないし、何やら変な虫が入り込んで暴れ、落ち着かないのです。

一方では当然ながら母校のフィフティーンに一生懸命応援していました。

実際、母校の選手の闘志に拍手も惜しまなかった、と胸を張って言えます。

そして、母校C高校は勝った。強豪相手に2点差という辛勝でした。

渾身のスクラムトライを決めたときは涙さえ自然に湧いてきたほど感動。

そんな自分に驚き、半ば呆れながらそそくさとラグビー場を後にしました。

だが、あの四文字が頭から離れない。誰にも訊けませんし・・・。

予定を変更して急ぎ家に戻り、早速四字熟語辞典を手に取り、引きました。

「あった!」、喜びと安堵感でところが一瞬満たされました。

しかし、それも束の間、すでに自分でその熟語を調べたチェックの痕が残っているのを発見し、この意味が己の頭に入らなかったことが判明。

また己の不甲斐なさに嫌気が差しました。

それはそうと、辞書には「乾は天を意味し、坤は地を指し、一擲とはサイコロを投げること」、とある。

つまり、「乾坤一擲」(けんこんいつてき)とは、のるかそるかの博打、という意味の極めつきの厳しい激励の言葉だったのだ。

まあ、死ぬ気でやれ!とまでは言わないまでも、非情な覚悟を感じさせる猛々しさを言質として宿していると思いました。

そしたら、我が母校の生徒はみんなこの意味を知っているのだろうか?

などと、負け惜しみするつまらぬ先輩になっている己に気づき、またまた嫌気がさしてしまった次第でした。

考えてみると、誰だって長い間人生やっていると、一度や二度の「乾坤一擲」の体験があるのではなかろうか?

人生の通過儀礼(セパレーション)のなかで、

受験や就職、結婚や離別などはこの「のるかそるかの博打」そのものなのかもしれない。

そう考えたら、この先還暦をとっくに過ぎた己に、いったい乾坤一擲の場面が到来するものだろうか?と気になりだしたのです。

そして、我がモーツァルトにおける人生の乾坤一擲とはどんな場面だったろう?とか、もう20年を経過した『モーツァルト広場』にとって、「のるかそるかの博打」ってなんだったろう?などと、あれこれ思いを巡らせていました。

どちらにしても、この先も、モーツァルトを鏡にして、愚にもつかないことを考える習性から解放されることはなさそうだ、と観念しながら。



ふたたび、手形山の義兄にまつわる話。

高齢からか夏場に体調を崩し、以前より外出しなくなった義兄宅に行っては見舞いがてら色々対話する機会が増えました。

義兄は我が親族では唯一で、しかも飛切りの学究肌の間人です。

ここで学究肌とは、ほとんど生理的に「事実に基づいた深い思考や対話の精神」を宿している、といった意味です。

彼は大仙市の片田舎の出身ですが、戦後間もない10代の出来事を鮮明に記憶しているらしく、興味深い話がすっきり整理されてポンポン飛び出てきます。

そんな昔話のなかで、先日聞き捨てならないビックリ「証言」がありました。

それは、義兄がO高校一年生の夏(1952年・昭和27年)の出来事です。

なんと、大仙市の大曲小学校を会場として、著名な指揮者である近衛秀麿が自ら結成したオーケストラを率いてコンサートを開催した、というものでした。

しかも、冷房もない真夏の体育館で、実に昼夜三回の公演をこなした、という驚くべき「証

言」だったのです。

さらに、その当時、日本のみならず欧州にも広く知られていた名指揮者の近衛秀麿（戦時下の首相、近衛文麿は異母兄にあたる）を秋田に招き入れた秋田出身の人物がいた、というのです。

その人物とは、深井史郎という当時全国的に著名な作曲家でした。

義兄はこのコンサートの際に、偶然にも近衛と深井二人の音楽界の巨匠を間近に拝顔することになったのでした。

どうしてそんなことになったのか、というと、この二人のために大曲の地酒を買ってくるよう、恩師に頼まれ二人の前まで持参したからでした。

二人の威厳ある鋭い表情に高一の少年は圧倒されたらしく、「怖かったなあ・・・」と多少興奮気味に、そして懐かしそうに話してくれました。

「ところで、何を演奏したの？」と尋ねたら、今度は苦笑いで、「それが、この三回の公演のプログラムは全く憶えていないんだ」、と悔しがっていました。

※深井史郎は現在の秋田市新屋の出身。明治40年に内科医の三男として生まれ、秋田中学を卒業後は20歳ころから音楽生活にはいり、昭和10年ころから作曲家として活躍、多くの作品を世に贈り出した。だが、仕事に忙殺されるなか、昭和34年52歳の働き盛りに京都の旅館で依頼された映画音楽を作曲中に狭心症により急逝。この悲劇は当時大いに世間を驚かせ、その死が惜しまれた傑物だったらしい。現在NAXOS盤CDで彼の作品集が販売されている。

以前、「フカイシロー」という名前は、片山杜秀の話で耳にしたことがあったが、特に関心も持たずに脳裡から消えてしまっていました。

この義兄の「証言」を享けて、早速県立図書館に出かけ、『恐るるものへの風刺』という深井史郎が亡くなって6年後、昭和40年に音楽之友社から刊行された随筆集を借りて通読しまし



た（友人で作曲家の長谷川良夫が編集刊行）。

冒頭、【俚謡を愛する】という戦前（恐らく二十代）に書かれた短文があります。

俚謡（りよう）とは広い意味で「民間のはやり歌・ひなうた・俗謡」のことで、民謡もそのカテゴリーに入るようです。

このなかで、深井は秋田県人としての矜持を懐きながら、「結局は異国的な憧れをそそるに過ぎない在来の西洋音楽に次第に失望を感じている」、と内面を吐露しています。

そのうえで、「秋田おぼこ」や「秋田追分」などを耳にすると、かつての己の中の様々な情景がたまらなく懐かしい、と綴っていました。

さらに今後の抱負として、「私は都会生活に倦み疲れた人の感傷として俚謡を取り扱うのではなく、もっと健康なわれわれの土台に立った音楽を生みたい」と結んだ深井史郎は、この後つぎつぎと優れた作品を作曲していきます。

最近、待望のNAXOS盤のCDを友人の手を煩わせて入手できました。

現在深井史郎の音源としては、たぶん一枚しかない貴重盤です。

三曲のオーケストラ作品が収められていますが、「もっと健康なわれわれの土台に立った音楽を生みたい」といった心情が実によく伝わる名作揃いでした。

彼が活躍した当時を片山杜秀は「大正的自由で豊かで国家を背負わず、あくまでインターナショナルな感覚に立つ音楽を自分のため世界のために作るべし」というのが同時代の作曲家たちの共通の出発点だった、と述べています。

何度も傾聴しましたが、とにかく、聴き易く面白くて愉しい、一度で好きになる「現代音楽」、といった印象が残りました。

また一人、地元秋田の偉人（ある意味で異人）を発見した喜びに浸ったものです。

※因みに深井史郎は県都350年を記念して、秋田市の市民歌も作曲している（作詞大木淳夫）。



深井史郎を知る切っ掛けをつくってくれた病床の義兄に、このNAXOS盤の作品集を是非聴いて欲しい、と思っています。

義兄が知る「威厳ある鋭い表情」の深井史郎

との60年後の再会です。

なにやらワクワクするのはどうしてなのだろう・・・。

ところで、秋田が誇るこの大音楽家が書き残した『モーツァルトの感情』という読み応えのあるエッセーには次のように書かれておりました。

《モーツァルトは古代のピエロである。

彼は人を喜ばし、笑わせるために

この世に生れてきた。

そして、この心情を知る後世の人たちを

泣かせるのである》

モーツァルトの本質を鋭く突いた頌辞として永く記憶していきたいものです。

end

私のみつけたモーツァルト

K334 『ディヴェルティメント第17番』－第4楽章－

会員番号 K.427 鎌田展禎

「あなたはそこにずっとそうしていたのですか——」

馴れ親しんだはずの響きの中から不意に新鮮な驚き生まれることはモーツァルトの音楽においてしばしばだ。こうした内的体験から本当にみつけえた彼の創造世界は私にとって生を潤す悦びの湧泉となる。

そう確かに認めると、物理学者・アルベルト＝アインシュタインの言ともされる比喩のとおり、〈死とはモーツァルトを聴けなくなること〉であるのかもしれない。

『ディヴェルティメント第17番』の第4楽章はそのおいたちが性格に作用したかのような慎ましいたたずまいが不思議と気になる存在だ。

どうしたわけか、モーツァルトの死後になって同曲のスコアがはじめて出版されたときは第3楽章とともにすっかり抜け落ちてしまっている。数年を経て不遇の両楽章を収録した完全版が登場するや、第3楽章は“モーツァルトのメヌエット”と愛称を冠される極めてポピュラーな作曲者の象徴となり、『第17番』をディヴェルティメント（嬉遊曲）分野の最高峰として世に知らしめた。

一方、第4楽章は前楽章のような単独演奏の機会はおそらく皆無であり、今もって“モーツァルトのアダージョたち”という一定の評価にあまんじている。

この第4楽章の底に感じとれる静かなやさしさに私は何度でも心をとほぐされてしまう。

何度も何度も耳を傾けて退屈するということがない。

このようにモーツァルトの音楽が手放せなくなるのは、はじめからのことでもいつの間にかのこともなく、必ずある日突然だ。どうやら、彼我の隔絶した天分がもたらす心象共有の時間差が埋まってのち、私はモーツァルトをみつけるらしい。

評論家・吉田秀和の執筆による『モーツァルト／交響曲変ホ長調』は、題材の『交響曲第39番』と、序奏の似かよったヨハン＝シュトラウス作曲の『美しく青きドナウ』を比較することで前者の精緻を浮き彫りにしたが、後者にまさるゆえんとされたモーツァルトの鋭敏な聴覚が第4楽章のおよそシンプルな構造と少量の音符にはたらきかけている。

とりわけ憂いを帯びて展開する中間部はすばらしい――。

夕陽を浴びた山陵が光角度の変化によって刻一刻と陰影をうつろわせるような微妙の色彩が最小限の意匠で表現され、そのことが楽章に奥ゆきをあたえ、楽曲に小憩をもうける最大限の効果へ帰結している。

故吉田氏がいうところの芸術性と通俗性をわけるもの、繰り返しの鑑賞に耐えうるか否かにかかわるものとは、このような注意深い配慮の積み重ねでしかありえないのではないか。

その証拠に、一聴して明確な傑作らしき刻印は第4楽章にない。それでいながら耳ざわりよく漂うありふれたBGMであることをはっきり拒否するなものかを内在している。

あるいは私の感知しえない天衣無縫の技巧が楽章全体を抑制する奥ゆかしさの正体ではあるまいか――。

素材をこのように扱う巨匠然とした手並みは円熟の境地をうかがわせるが、『第17番』が成立したと推定される1779年のモーツァルトは23歳でしかない。筆致にふさわしい人物であったかといえば必ずしもそうではなかった。

同時期に父・レオポルトへ宛てた手紙の中で、同曲の依頼主である名門貴族・ロビニヒ家のヴィクトリア夫人をく近頃おめにかからなかったくらいの馬鹿>とこきおろす威勢のよい若者だ。この言動と芸術の距離こそ、モーツァルトの精神が活動する範囲とみなしてかまわないだろう。

映画『アマデウス』のアントニオ＝サリエリはその両端の矛盾によって神の介在を信じるにいたるが、あの生命讃歌のかずかずが鋭敏な聴覚のみで無機的に量産されるはずがない。ひとつひとつの小節に息吹の種を宿したように、日常の出来事ひとつひとつを感じすぎるほどに感じたモーツァルトであったろう。

ヴィクトリア夫人のために補足すると、音楽家としての矜持と自由人としての欲求から、モーツァルトは大体にして門閥権威そのものと相容れない性質であったことは事実だ。(ただし、同家の長男・ジークムントと三女・マリア＝アロイジアへそれぞれ友情と恋情を抱いている。)ましてや、宮廷を嫌悪する当時の彼と支配的な領主・大司教の決裂がもはや時間の問題であった沸点の直前においてである。

やがてモーツァルトは故郷・ザルツブルクを脱して最後の10年をウィーンではじめるのだ。

天才の功罪とはかくなるものか、ロビニヒ家はモーツァルトの音楽を望んだがために風化することのない名曲と侮辱を対にして贈られた。

第4楽章を艶やかに華やかに演出したヘルベルト＝フォン＝カラヤンの指揮(1987年/ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団)を推薦したい。

新芸術文化施設に期待すること

会員番号 K.10 畠 山 久 雄

佐竹知事と穂積市長は9月1日に県庁で会見し、新たな複合文化施設を共同で県民会館の所在地に建設する方針を表明しました。秋田県民会館と秋田市文化会館は老朽化しているため、機能の重複を避けて充実した施設にしようと県と市が共同で建設する方向であると報道されております。

県と市が今年2月に発表した「新たな文化施設に関する基本計画（案）」によると、2,000席と800席の2つのホール、舞台形式は2ホール共にプロセニウム型となっています。客席からステージを見て境目が、まるで額縁のように見える形式をプロセニウム形式と呼びます。よって本稿ではプロセニウムを取り敢えず「額縁」と呼ぶことにします。つまり、県民会館も市文化会館大・小ホールも額縁形式であり、いわゆる「多目的ホール」でもあります。

一方、アトリオン音楽ホールは、客席とステージの天井や側面が連続しており境目がなく、ちょうど「靴箱」のような形をしていることからシュー・ボックス型と呼ばれ、クラシック音楽鑑賞には最適な音響環境であり、いわゆる「音楽ホール」と呼ぶ所以でもあります。

額縁形式は、演劇やオペラなどを上演することを目的とした劇場に適した形式であり、「生の音」である音楽を聴くためには不都合です。これを補って「音楽ホール」のような機能を持たせるためには反響板が必要であり、そのような機能を持ったのが「多目的ホール」なのです。ところが、昔の「多目的ホール」には、「生の音」を客席に十分に伝えられない、音が悪いという大きな欠点がありました。

音を良くするためには、額縁を大きくして客席と連続する方法があります。額縁サイズの横方向は間口、縦方向は高さと呼びます。実は県民会館も市文化会館も額縁の高さはたったの「8m」しかありません。両ホールは、額縁の高さが低いため音を悪くしていると考えられます。

額縁形式でありながら、最近作られているホールの額縁高さは、由利本荘市文化交流館カダレ12.96m、酒田希望ホール12.6m、岩城芸術文化交流館アリオス15m、アクトシティ浜松14.4m、愛知県芸術劇場12m、滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール15.5m等々、いわゆる額縁高さを確保し、多目的ホールでありながら音響的にも優れた設計となっております。

さて、「何を言いたいのか!」、県と市の基本計画案の中に額縁の高さは一言も書いていない。しかしながら額縁の高さは、ホール設計の基本中の基本であり、一旦、建物のサイズが決まってしまうと額縁の高さを確保することは困難です。

したがって、基本設計前に「額縁の高さは15m以上欲しい!」と声を大にして関係者に知らせましょう。音響と額縁高さについて知る人は些少です。モオツアルト広場会員から、できるだけ多くの人にお知らせすることにしましょう。

ところで、多目的ホールの舞台の真上には、吊り物のための大きなスペースが必要であり、額縁の高さ以上の高さを必要とします。現に、既存の県民会館・文化会館にも高さ10mを越えるスペースがお客様から見えない部分に存在しております。よって、額縁高さを15mにしようとすると、約17mの見えないスペースが必要で

あり、合計の高さは32mを越え、これは計画段階から考慮しなければならない数字であります。果たして、千秋公園内にそんな高い建物を建てて良いものか。中心市街地活性化のために県民会館跡地に立てる計画、そのものに無理があるかもと危惧しています。現県民会館の額縁の高さがたったの8mしかないのも、高さ制限が原因であったのかも知れません。

ところで、県と市が今年2月に発表した「新たな文化施設に関する基本計画（案）」の中で、新たな文化施設整備後の秋田市内の主な文化施設の役割という一覧表があります。県民会館ホール（1,839席）に代わり2,000席のホール、市文化会館大ホール（1,188席）に代わり800席のホールという位置づけのようですが、市文化会館小ホール（400席）とジョイナス多目的ホール（150席）は記載されてなく、一覧表からは読み取れず検討から消滅しています。

消滅するホールは確かに利用率が低いのですが、人口減少に対応した施策と割り切って良い

のでしょうか。売り上げが落ちてきたからとフロア面積を減らしたり、従業員を減らしたりする組織と同じで良いものでしょうか。人口が減少しても文化を育て、活性化することが大切と考えます。

また、文化を育てるためには多くの練習場が必要です。市文化会館、ジョイナスにある多くの練習室を新文化施設内に併設できるのか、計画案には明示されていないので心配になります。蛇足ながら、県民会館を解体して新たな施設が完成するまでの期間（3年位か？）は、1,000席以上のホールが市文化会館だけになることも忘れてはなりません。

「何を言いたいのか！」、今のうち文化施設の諸事情を知っている人を計画作成に加え、後悔しない施策を推進していただきたい。「失敗しても失敗と気付かない方々」で計画を推進するのは怖いものです。

（続く！）

酒とモツの日々（35）

会員番号 K.488 佐藤 滋

今年も紅白歌合戦の放送が近づいてきました。私は演歌や歌謡曲がモーツァルト以上に（もとい）モーツァルト同様に好きなものですから今年も楽しみにしています。特にほろ酔い気分で懐メロが楽しめる第2部が。

私が好む演歌・歌謡曲は、複数の感情が対立、あるいは併存している複雑な作品です。例としては、微笑に浮かぶ涙（「秋桜」の咲く庭で嫁ぐ娘を前に涙ぐむ母）、怒りの中の楽しさ（悔しさを秘め明るく話す「氷雨」のなかの酔女）、哀しみのなかの喜び（着てはもらえぬセーターを愛おしく編む「北の宿」の女）、幸せの中の恐れ（ただ貴方の優しさが怖かった「神田川」銭湯帰りの娘）、希望のなかの不安（時は未来

を連れてくるけど、過去のどこかで「思い出迷子」になっているテレサ・テン）・・・等々。

これら輻輳した感情を巧みに歌いこなす表現者が、名歌手として評価されるのだと思います。心の複雑さ、それは多くの詩人を悩ませ、励まし、創作意欲をかき立てたものでした。

この気持ちは何だろう・・・

よろこびだ しかしかなしみがある

いらだちだ しかもやすらぎがある

あこがれだ そしていかりがかくされている・・・（谷川俊太郎「春に」）

では、モーツァルトの音楽に私情・感情はあるのか？そもそも喜怒哀楽は明確なのか？

私の感想ですが、モーツァルトの音楽は感情

の対立ではなく、自身も気づかぬ感情の深奥にある世界を映してくれるものだと思うのです。映画「アマデウス」で、聴衆の代表サリエリが一瞬にしてモーツァルトの天才を見抜いた名場面。管楽セレナーデ第10番「グランパルティータ」K.361 第3楽章アダージョ。「はじめは壊れたアコーディオンのようにシンプルに、しかしやがて天の高みからオーボエが・・・歌い出す」。このソロはオーボエ奏者にも特別な想いをもたらすようで「オーボエのロングトーンには何の感情も主張もない。モーツァルトの音楽は夕暮れの空のように刻々と変化するだけ・・・」(茂木大輔・著「拍手のルール」と、演奏の喜びと難しさを綴っています。

確かに空は何の感情も示さない。けれども私たちは、空をみて様々な自身の感情を投影し、心の深奥と向き合う自分を見いだすのです。狭いながらも楽しい我が家を思う世帯主(私の青空)、戦争からの救いを求める人びと(碧空)、天国の家族とふれあう幼女(ちいちゃんの影送り)、涙をこらえる若者(上を向いて歩こう)、こよなく晴れた青空を悲しと思う寡夫(長崎の鐘)・・・等々、同じ青空に人の思いは様々。

モーツァルトの音楽は、そんな空のようなものかもしれません。

モーツァルトの凄さはオペラにも見られます。オペラという単純なお話に登場する平凡でお馬鹿な登場人物(パパゲーノ、ケルビーノ、レポレロ・・・等々)にも隠れた魅力を映し出してくれるモーツァルトの音楽。平凡な人間にも、馬鹿な行いにも、聴く人によってはそこに魅力的で複雑な人物像を見て取れるのです。失礼ながらヴェルディもプッチーニも「善は善」、「悪は悪」なのです。

そういえば、文科省が決して推薦しないようなハードボイルドや、やくざ映画には、モーツァルトの人間観察に通じるような素敵な台詞が顔をのぞかせます。

「彼は優秀よ。でも私は平凡な貴方の方が好き」(映画「孤独な場所で」)

「なんで俺みたいな馬鹿を?」「馬鹿なあんたが好きなのよ」(映画「昭和残侠伝」)

「人間偉うなると、内面より外面を大事にするもんでんな」(映画「やくざ戦争」)
まことに人の面白さは測りしれません。それでこそ、人生も刺激的なのでしょう。

事務局より

先月のことでしたかあるテレビ番組で芸能人のピアノ選手権のような特集がありました。テーマはどれだけ楽譜に正確に弾けるか。課題曲はモーツァルトのピアノソナタ第11番トルコ行進曲。誰もが効いたことがあるこの曲、鍵盤を真上からテレビカメラが捉え、その指使いをアップで映す。またどこか間違ったかを解説する画面が。聴くと弾くでは大違いだ

というのを改めて感じました。芸能人はもちろんプロのピアニストでも小さなミスはあるんですね。でもミスも含めてすべてが音楽。奏らえる音だけじゃなく演奏者の迫力、場の雰囲気すべてを合わせて音楽なのでしょう。僕もミスを恐れずに楽器を吹き続けたいなと思っておりました。(K575)

モーツァルト広場ではいつでも会員を募っております(H27年11月現在102名) [モーツァルト広場](#)

入会金：¥2,000 年会費：¥3,000 (諸会費、別途)

お問い合わせ……〒010-0954 秋田市山王沼田町10-11-203 加藤 携帯電話 090(7939)4058
又は 本田 (事務局) 080(1673)8322